

人権 談話室

自分をカエル 見かたをカエル



こんな詩があります。

「ふるさとをかくす」「ことを父は

けものような鋭さで覚えたふるさとをあばかれふたたびかえらぬ友人がいたふるさとを告白し

許婚者に去られた友人がいたわが子よおまえには胸張ってふるさとを

名のらせたい瞳をあげ何のためらいもなく「これが私のふるさとです」と名のらせたい

これは丸岡忠雄さんという人の詩です。みなさんはどう思われますか？

ふるさとを大切に思う心

人は誰でも自分のふるさとを大切に思っています。しかし、ある被差別部落出身の方は、昔仕事で都会に出ているときに、「ふるさとはどこですか？」と聞かれるのが一番つらかったと言います。それはなぜでしょうか。

この人がふるさとを嫌っていたわけではありません。多くの人と同じように自分の生まれたふるさとを懐かしく、恋しく思っていたらいいのです。しかし、生まれ故郷を明らかにすれば、そこが被差別部落であることが判明するのを恐れていたのです。

いったいなぜ、そんなことを恐れていたのでしょうか。それはとりもなおさず、現実にこの社会に差別が存在するからです。

差別はふるさとを奪う！

部落差別のように、出身地すなわちふるさとがどこであるかを根拠に差別が行われる場合には、被差別の立場にある人から、「ふるさとを奪う」ことになってしまいます。なぜなら、この詩にもあるように、ふるさとを明かせば、今の居場所をおわられたり、許婚者に去られたりするという現実があるからです。「ふるさとを奪われる」「事の苦しみは、おそらく言葉では言い表せないほどでしょう。だから、差別は絶対に許すことが出来ないのです。

人の値打ちは出身地で決まるのか？

人の値打ちは出身地で決まるものではありません。なぜ、人は出身地を聞きたがり、詮索したがるのでしょうか。現実に起こった結婚差別事例などを分析してみると、被差別の立場にある人との婚姻関係が出来る自分たちも差別されるといっておそれから結婚に反対するというケースが多くあります。この場合、相手の人権はまったく無視し、ただ相手が

差別の無い社会をめざして

出身だからというだけで反対しているのです。これは、差別を肯定し、自分の立場を守るためだけに、二人の幸せを破壊するものです。このようなことで結婚に反対して誰が幸せになるといえるのでしょうか。結婚差別は差別を受けた人を不幸にするばかりでなく、反対によって引き裂かれた相手さえも不幸にします。

結婚はその人の人生を左右する大切な問題です。だからこそ、すべての人が自ら選んだ人との結婚を祝福されたいし、周りの人はそれを祝福したいのです。しかし、前述したように差別が存在し、それをそのまま放置している社会では、祝福したくても祝福できない状況がおこります。私たちは社会の不合理を一日も早く解消し、人が出身地や家柄で評価されるのではなく真に人間として評価される社会を築き上げなくてはなりません。

人権施策課